
クリスマスか Magic Kings' Day か

森 宣 (Hiromu Mori)

大分県 JICA 派遣専門家連絡会会長
大分大学医学部放射線医学講座



手紙（封書）が電子メール（email）に取って代わられて久しく、私のもとに届くクリスマスカードやニューイヤーカードの大半はemailである。しかし10人に足りない数の友人からは毎年封書によるクリスマスカードが12月初旬に必ず届く。北米、ヨーロッパ、オーストラリアからである。アジアからは無い。私の方はいえ、年賀状の長年の習慣から脱することができずに、クリスマスカードをいただいても返信であるかのようにニューイヤーカードを年末に速達で出すという有様が続いている。友人たちの寛容さに感謝するばかりである。

2016年に届いた封書のクリスマスカードを開けてみて感じ入った事がある。それは何と全部が「Peace」の大文字キーワードで、ハトが小枝などをくわえて飛んでいる絵であったことである。それぞれ（あるいはその家族）は個性豊かな友人達であるが、一斉に思う事、願うことは「Peace」なのだ。世界中で多くのテロリズムの被害があり、中東からの難民のニュースとともに、深い怒りと痛みを世界規模で感じざるを得ないこの頃、私も心から世界のPeaceを祈りたい。

日本では2016年を表す漢字は「金」が選ばれたと報道されていた。オリンピックの金メダルやお金にまつわる不祥事が多かったのではという

ことらしいが、国内のことなのでとやかくいう事でもないが、相変わらず内向きでこれで良いのかなと感じるのは私だけだろうか。



私達大学に所属を持つ者は、その学術的な仕事で戦うとき（世に問うとき）は英語である。若い時から英語での発表、英語での論文書き、英語での意見交換と、すべて英米カナダあるいはオーストラリアを舞台として鍛われてきた。それにどっぷり漬かっていた私が、国際協力にてドミニカ共和国とカリブ中米諸国を知る機会を得たのち、学会活動でスペインにも親しい友人ができ、医局員の留学先をそれまで英語圏一辺倒だったのを改め、昨年からはスペインへ留学

開始したところである。

スペイン語圏の方々と接して、それまでの私自身の狭量な世界観をひっくり返してもらおうような出来事は多々あったが、その中でも今日は2つ紹介したい。一つ目はワイングラス事件で、ドミニカ共和国を訪れた時である。そのとき派遣されていた医師と技師とともにある家庭に招待されたときのことである。いただいたスペインワインとアルジェンティンワインはとても深い味わいで美味しく（もちろん赤である）、ほろ酔い加減になった我々のひとりが並々と注がれた大きいワイングラスを肘で触ってしまい、グラスは床に落ちて粉々に割れ赤ワインは床一面に広がった。日本人は皆青くなり「あ、すみません!! Perdon, Perdon!!」と一斉にかがんでハンカチと紙で拭き始めたが、対照的にドミニカ人は皆立ち上がり満面の笑みとともに「Congratulacion!!」と拍手し始めた。最初は客へのやさしい思いやりかなと思ったが、本気でおめでとうと言っているのに気付いた。「グラスが割れる事、ワインがこぼれる事は大変な幸運が来ることを示しているのですよ」という通訳の方の言葉に、なるほどと合点がいった。ギリシャやイタリアでも結婚式や宴会で皿を壁に投げつけ派手に割って幸運を願っていたな、割れることによって悪いものがなくなるということのようである。私にとって目から鱗のような経験で、いまでも良く思い出す印象的な光景である。ドミニカ共和国は香り豊かなコーヒーでも有名だが、コーヒーが受け皿にこぼれてもお金が舞い込むサインだと言って喜ぶ。私は毎朝のようにこぼしていても一向にお金は舞い込まないが、幸運のサインだと思うだけで楽しくなるのは確かである。

もうひとつは、「Magic Kings Day」あるいは「Three Kings Day」を教えてもらった時である。スペイン語圏の子供はクリスマスよりも1月6日の「Magic Kings Day」を大変楽しみ

にしており、親も1月6日に向けて散財をするのが習わしである。1月5日の夜には街を挙げて祝う。3人の賢人あるいは王がイエス・キリストの誕生を祝うため到着したのを記念して、子供たちにはスイーツ、キャンデイが投げ与えられ、子供たちは家に帰ってベッドの下にチューロンとシャンペンと3人の王のために、水と食べ物を彼らに乗せてきたラクダのために置いて、自分たちの願いが王に聞き入れられるように祈って眠りにつく。翌朝に親の散財の結果のプレゼントが大きな靴下の中に入れられている、という訳である。

今から2000年前の新約聖書マタイ (Matthew) による福音書に、東方から学者たちがベツレヘムへ来てイエス・キリストの誕生を祝い、乳香、没薬、黄金を贈り物として捧げた、という記述があり、このThree Kings Dayの起源となったと言う。7世紀ころから3人の学者はMelchior (黄金)、Balthasar (乳香)、Casper (没薬) と名前がつき、15世紀にはそれぞれ3大陸 (欧州、アフリカ、アジア) から来たと言われ、多くの絵や壁画にて3人の肌はコーカシアン様、アフリカ人様、アジア人様に描かれるようになった。なぜ1月6日なのかも諸説あり、イエス・キリストの洗礼の日とかローマ時代に栄えたアレキサンドリアの祭典だったとか言われている。

もともとの史実はともかくとして、平和の象徴イエス・キリストを拝む3人の賢者のオリジンを3大陸 (欧州、アフリカ、アジア) として、人々は世界の融合による平和を祈ったということは実に興味深い。クリスマスの起源との同異を論じるのは避けておくが、いずれにしても世界の平和を願う時間である。世界中のテロに屈せず、世界の融合を願いたいと思う。国際協力の現場は、知らず知らずして現地の文化と歴史を紐解き、世界の融合を組み上げる素晴らしい機会であることを再確認して、感謝したいと思う。

中米ドミニカ共和国から最高栄誉賞を受賞 － 20年超え医療分野を支援、森 宣教授

中山 晃 一

大分大学医学部附属病院放射線部

この度、大分大学医学部放射線医学講座教授であり当大分県 JICA 派遣専門家連絡会会長でもあります森 宣先生が、ドミニカ共和国よりドゥアルテ・サンチェス・メジャ賞コメンダドール位を受賞されました。なお本原稿のタイトルは JICA ホームページ上にあります 2016 年 9 月 13 日付の JICA ニュース・トピックスのタイトルから引用したものです。今回の受賞に至った経緯につきましてはこの JICA ニュース・トピックスに書かれていますのでそちらをご覧くださいとしまして、ここでは賞の紹介と授賞式および祝賀会の様子についてご報告させていただきます。

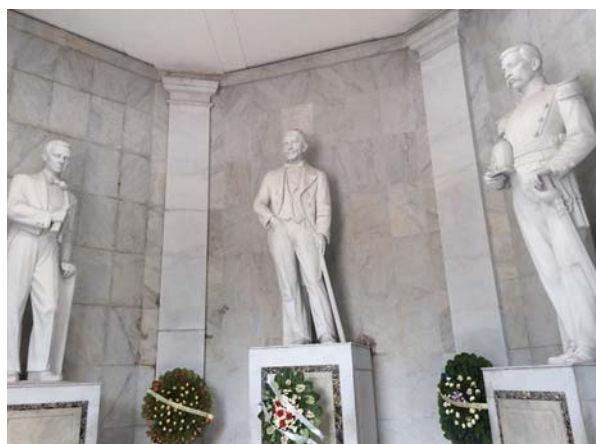
この賞の適切な日本語訳は有りませんが強いて言えば、大統領最高栄誉賞：ドゥアルテ・サンチェス・メジャ記念賞・コメンダドール位、とでもなるのでしょうか。ちなみに、コメンダドール位は直訳しますと上級騎士団、司令官、指揮官位となり、ドミニカ共和国から国外の民間人に与えられる最高位の賞だとのことです。

この賞の賞状には、「この賞は、(ドミニカ)共和国建国の祖である フアン・パブロ・ドゥアルテ、フランシスコ・デル・ロサリオ・サンチェス、ラモン・マテアス・メジャを記念して創設された、人類に対する有益な奉仕で傑出したことを成しとげた功績ある者に対し祖国が感謝の念をもって授与する、最高栄誉賞である。」と記されています。

建国の祖 3 人の英雄の墓は、旧市街に近い「建国公園」(写真 1-1) の中にあります。公園の廟堂の中に、3 人の彫像と棺があり(写真 1-2)、3 人のご遺体が眠っているとのことです。棺には、3 人の名前が並んで刻まれています(写真 1-3)。



(写真 1-1)



(写真 1-2)



(写真1-3)

ドウアルテ・サンチェス・メジャ賞は、ドミニカ共和国大統領令により発せられる勲章です。(写真2)が、その大統領令の文章のコピーです。上段の部分を見ていただければわかります通り、文章はダニーロ・メーディーナ大統領の名前から始まっています。法に基づき、CEMADOJA(ドミニカ・日本友好医学教育センター)での功績をたたえ、森 宣先生にドウアルテ・サンチェス・メジャ賞コメンダドール位を授与するとあります。日付は2016年7月12日とあり、最後に大統領のサインがあります。



(写真2)

授賞式は、今年の7月29日にドミニカ共和国サント・ドミンゴ市でありました。本賞は本来であれば大統領または代理として外務大臣が授与すべき賞とのことですが、日程が合わなかったため、保健省首都地域局長のヘルナンデス氏からの授与となりました(写真3)。しかしながら、授賞式でこの勲章を受章者の首にかけることができるのは大統領か外務大臣のみのため、ヘルナンデス氏は森先生の首に直接勲章をかけることはできず、勲章と賞状を手渡す形式での授与となっています。それだけ権威のある賞であると言えます。



(写真3)

勲章を(写真4)に、賞状を(写真5)に示します。勲章には建国の祖3人の英雄が刻まれています。また賞状の上段筆頭にドミニカ共和国大統領ダニーロ・メーディーナ氏の名前があり、



(写真4)



(写真5)



(写真6)



(写真7)

左下段には外務大臣のサインが、右下段には大統領のサインがあります。

授賞式の開会の様子を(写真6)に示します。授賞式は、両国の国歌演奏から始まりました。森先生もドミニカ共和国に敬意を表し胸に手を当てています。軍出身者は直立不動です。ドミニカ共和国政府関係者、医療協力の拠点となったルイス・エドワール・アイバール保健都市の関係者、在ドミニカ共和国JICA所長の皆様が出席されました(写真7)。森先生の教え子である放射線科医師たちも授賞式に駆け



(写真8)

付けました(写真8)。その他、森先生とゆかりのある大勢の方々も授賞式に参加されました(写真9)。現地では、多くの新聞によりこの表彰式のことを報道されました(写真10)。



(写真9)

Gobierno condecora radiólogo Hiromu Mori con la “Orden de Duarte Sánchez y Mella”

Durante las festividades de fundación del XVI aniversario del Centro de Educación Médica de Amistad Dominico Japonesa (CEMADOJA), perteneciente al Ministerio de Salud Pública (MSP), fue entregada una condecoración del Gobierno dominicano al médico japonés, Hiromu Mori, radiólogo.

El reconocimiento, con la Orden de Duarte, Sánchez y Mella, en el grado de “Comendador”, fue aprobado por el presidente, Danilo Medina Sánchez, galardón entregado por los doctores Julio Manuel Rodríguez Grullón, Félix Hernández y Alejandro Montero Valdez.

La ministra de Salud Pública, Altagracia Guzmán Marcelino, estuvo representada por el doctor Félix Hernández, director



Entrega de la medalla al radiólogo japonés Hiromu Mori, en presencia de Julio Manuel Rodríguez, Félix Hernández y Alejandro Montero Valdez.

regional de Salud del Área Metropolitana.

Rodríguez Grullón es el encargado de Educación Médica e Investigación y presidente del Seminario Internacional; y Montero Valdez, director de CEMADOJA.

Detalles

El doctor Mori llegó al país en el 1992, en el plan de la Agencia de Co-

operación Internacional del Japón (JICA) y transcurrido más de 20 años, ha estado viajando a Japón y de vuelta al territorio dominicano.

El homenajeado es graduado de la Universidad de Nagasaki en el 1977, siendo jefe profesor e investigador del Departamento de Imágenes de la prestigiosa universidad de Oita en Japón.

(写真10)

10月4日には大分市内で受賞記念講演会並びに受賞祝賀会が行われました。この式典には、東京から在日ドミニカ共和国のエクトール・ドミンゲス大使ご夫妻、日本・ドミニカ共和国友好親善協会の鈴木渉会長ご夫妻をお迎えし、大分大学からは、医学部長守山正胤先生、医学部附属病院長津村弘先生にご列席をいただきました。またドミニカ共和国で行われたJICAの医療協力プロジェクトで活動された方々、その関係機関の方々、次世代を担う若い医療関係者の方々等、総勢90名近くが出席されました。祝賀会は大変に盛況な会となり、ドミニカ共和国大使ご夫妻も出席者と大いに親交を深められました。そして何より有意義であったことは、ドミニカ共和国と大分大学の関係がさらに強固なものとなり、将来に向けた医療協力の意思の確認が双方で行えたことだと思います。祝賀会の様子を(写真11～写真13)に示します。

森 宣先生、ドゥアルテ・サンチェス・メジャ賞コメンダドール位のご受章、誠にありがとうございました。



(写真11)



(写真12)



(写真13)

ドミニカ共和国に通って28年

寺 尾 英 夫

大分大学名誉教授

ドミニカ共和国（以下ドミニカと略す）における JICA プロジェクトが2009年終了して大分大学医学部の中でドミニカの事を語る人も少なくなった。ドミニカの JICA プロジェクトのことを知らない人もでてきている状況の中、放射線科の森 宣教授が大統領から国民栄誉賞をいただき、久しぶりにドミニカの風が吹いたような気がする。今年（平成28年）10月4日約100名が参加して盛大に祝賀会が開かれた。この会には在日本ドミニカ共和国エクトール・ドミンゲス大使夫妻も出席されたが、参加者の約8割の人がプロジェクトに参画していることにとっても驚いているご様子だった。過去に何度かドミニカ会を開催したことはあったが久しぶりにドミニカ関係者の集まりで盛り上がった。

さて私事については最近全く書いてなかったので幹事から書くように仰せつかった。忘れていた昔を思い出しながら筆をとることにした。私が初めてドミニカに行ったのは昭和の最後の年（1989年、昭和64年2月）で調査団の一員として約2週間の訪問であった。この時は私が初代のプロジェクトリーダーに決まっていたため調査団の一員に加わったのであった。当時はドミニカが何処にあるのかも知らなかったし、どんなジャングルに病院を建てるのかなど相当無知のままでの訪問だったような気がする。

そして1990年（平成2年）12月消化器疾患臨床研究プロジェクトの初代リーダーとして赴任した。私とコーディネーター、放射線技師の3名でのスタートであった。まだ病院は建築中



Dr. ホンチョンファミリー 1990年からの友人 2010年撮影 長女は現在医学生

であり我々に与えられた事務所は扇風機だけの小さな部屋、非常用の発電機がすぐ側にあり、それが常用に使われているため1日中騒音に悩まされたが知らないうちに慣れてしまった。建築の進行と共に病院のシステム作りをまずはしないとイケない。当初話し合いをしても日本側とドミニカ側がなかなかかみ合わない。医学は世界共通だと私が思っていたのがいけなかった。「医学は世界共通でも医療はその国独特のもの」ということに徐々に気が付き始めたものだった。日本には譲り合いの精神があるがドミニカにはその精神がなさそうだと気付いたのも最初の頃だった。そうは言っても先へ進まねばならないが次から次に問題が発生した。例を挙げればきりが無いが少しだけ挙げると、日本が病院を作ることに對するドミニカ医師会の反対、日本人臓器略奪報道(いやがらせ)、医師のストライキ(約4か月続いた)、日本人JICA専門家殺傷事件、冷蔵庫も無い時に冷蔵試薬が送られてきた、しかもコンテナ一個分位、日本から送られた医療機器が税関からなかなか取り出せない等々毎日事件や問題が発生したものである。このような問題も現地側の人と日本側の人との心の触れ合いができるようになってから徐々に解決へ向かい順調に進みだした。この消化器プロジェクトは7年間(1990.1. - 1996.12.)で惜しまれながら終了した。あとは現地側に全てを託すことになる。無償資金(約14億円)と技術協力(年間3000 - 4000万円)のドッキングが非常にうまくいったプロジェクトとして評価を受けた。

その後3年をおいて大分医大放射線科を中心とした画像診断教育プロジェクト(無償資金と技術協力、1999 - 2004年)、続いて画像診断・教育を目的とする第3国研修(技術協力、2005 - 2009)と続くのである。大分医大が中心になって行ったドミニカにおけるJICAプロジェクトは17年に亘るものであった。ドミニカに行くと医療関係者はもとより一般市民もドミニコーハポネス(dominico-japones)の病院といたら

知らない人はいない程有名になった。

私の役目は最初のプロジェクトリーダーの2年間とその後の専門家としての数か月で終わりのはずであったが、なんとその後、今年(2016)までほぼ毎年通うことになってしまった。今まで何回通ったか数えきれなくなった。その理由の一つは科学研究費によるプロジェクトである。

虚血性心疾患の国際比較研究

1991(平成3年) - 1993(平成5年)

伊東盛夫ら

1994(平成6年) - 1996(平成8年)

小澤秀樹ら

肥満遺伝子研究

1998(平成10年) - 2005(平成17年)

坂田利家ら

ヘイコバクターピロリ研究

2010(平成22年) - 2012(平成24年)

山岡吉生ら

私はこれらの研究プロジェクトの全てに関わったためほぼ毎年1 - 3回ドミニカへ通ったのである。それ以外では私は

サントドミンゴ自治大学の名誉教授(1996~)の称号を頂いたり

ドミニカ共和国科学アカデミー名誉在外会員になったり

したため毎年招聘が来て医学部の学生やら医師会等で講演をさせられたのであった。

長年ドミニカに通っていると多くの友人ができた。今ではホテルには泊まらない。友人の家で三食食事付の居候である。今だったらもっと素晴らしいプロジェクトリーダーになれるだろうと思うがやや年取りすぎた。多くのドミニカの友人のお陰で科研の仕事も大変スムーズにできた。その仕事の成果は国際的学術誌に掲載されている。もちろんドミニカ人の研究協力者も共著者であり彼らにとっても喜ばしいことである。

途上国の援助はプロジェクト中は順調に進むが終了すると機能しなくなったり、場合によっては廃墟化することもあるといわれるが1990年

から始まった消化器センター、1999年からの画像診断センターは2016年の今も営々と営まれている。プロジェクトの立ち上げに参加した私にとって最高の喜びである。Dominico-japones

病院といわれる二つの施設が続くこと、そして更なる発展することを心より願うと共にドミニカの人々の健康・幸せを願う。



ドミニカ科学アカデミーで講演 2010年



サント・ドミンゴ自治大学医学部での講義2016.



サント・ドミンゴ自治大学医学部での講義2016.

「ニカラグア国農牧分野職業訓練改善プロジェクト」 第二報

中 村 進

ニカラグア国
農牧分野職業訓練改善プロジェクト
チーフアドバイザー／畜産技術



ニカラグアの農業の実態と職業訓練

1. 農業の実態

農業の盛んな地域は、国土の中央部から西側で、東部カリブ海側の平地は、熱帯雨林気候で湖沼と湿地及び森林混在して農業には余り適さないようです。農業適地とされる中部と西部の地域も、雨季と乾季があって、乾季には草も枯れてしまい灌漑施設がなければ通常の作物栽培はできません。

農家の約8割は35ha以下の小規模農家で、これら農家の多くは自給用のトウモロコシやフリフォーレス（インゲン豆）を栽培し、自然草地を利用して牛や羊、山羊を粗放的に飼育して肉や乳の生産をしています。この国では

冷蔵輸送インフラが整っていないので、乳製品の流通には色々な課題があります。

大規模農場では灌漑施設を導入し、近代的農法で欧米への農産物を生産しています。かつては、こうした農業経営において農薬や化学肥料を多量に使い、生産性が落ちると新しい



灌漑施設を備えた大規模農場。年間を通じて主に輸出農産物を栽培している。



ニカラグア国土とプロジェクトが対象とする職業訓練校の位置（赤い付箋の14カ所）。



大規模の水稲栽培。小型飛行機で播種や農薬散布を行う。

農地を求めて移動し、残るのは疲弊した農地と地下水汚染でした。現在は国として農薬や化学肥料に頼らない有機農業を推進しています。

2. 授業構成（カリキュラム、授業の進め方）

プロジェクトが対象としている中級農牧課程の専門科目には、農業関係の「基礎穀物」「植物生理」「土壌と水管理」「総合防除」「農牧機械」「アグロフォレストリー」「苗と育苗」「野菜」「根と根茎」「果樹」、畜産関係では「家畜栄養」「家畜の解剖と生理」「家畜繁殖」「牧草と飼料作物」「大家畜」「小家畜」「家畜衛生」「畜産施設」「牧畜生産計画」があります。2年間でこれらの全科目を順番に履修することが、訓練学校の大きな特徴です。日本ではそれぞれの科目を並行的に学びますが、ニカラグアではAが終わってB、その後Cとなります。

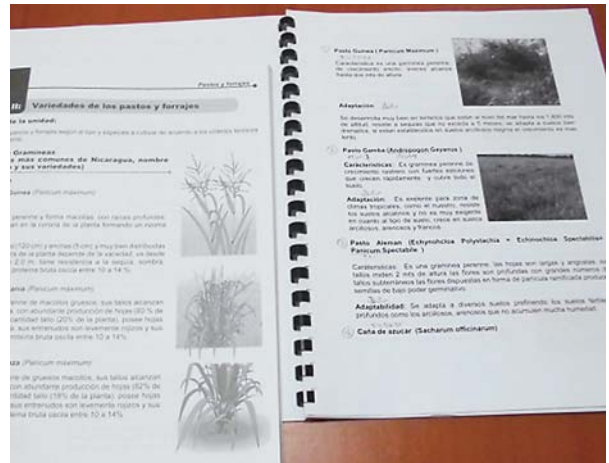
実習は、各科目の授業時間数の7割を当てることになっています。テキストに書かれた技術を教わることに重点があるようです。日本では、作物の播種から収穫販売までを経験して、テキストに書かれた技術がどのように関わるかを理解するのですが、ニカラグアでは教材が少ない上、授業が作物の生育と関係なく組まれるので、作物の栽培と関連した実習は困難なのでしょう。



室内でのサイレージ調製の実習。

3. テキスト

学校で使われるテキストは、これまでもほとんどが支援団体によって作られています。しかし、



コピーしてもわかりやすいように線画を採用。
(右：改訂前、左：改定後)

執筆は教師のことが多いようで、学生がわかりやすいものにはなっていません。図表はほとんどなく、写真はインターネットから引用しています。しかも、学校にテキストがあれば良い方で、学生に配布されることはありません。データで配布されたテキストや各種資料のコピーを学生に配布するか、教師が文章を板書し、読み上げるのを学生はノートするのが授業の一般的風景です。

授業は、2時間から2時間半と変則的で、日本に比較してかなり長時間なのに驚きます。この長時間の授業を運営するために、教師は事前の資料集めや準備に苦労しています。

プロジェクトではテキストをコピーすることを前提に、写真は排除しコピーしてもわかりやすい線画を導入しました。また、図表をできるだけ挿入して、文章だけでは理解しにくいこともわかりやすく表現し、本文では説明できない関連事項などをコラムで挿入しました。日本の教科書では普通のこのような構成は、ニカラグアのテキストでは初めてではないかと思われます。

4. 施設・設備

プロジェクトに取り組む前に、全国の職業訓練校の実態を視察しました。多くは車での移動でしたが、東部の都市への移動は道路事情の悪い道路を遠距離移動となり、犯罪を避けるため



近代的な農畜産物加工用の器具。



マチェテはカマ、剪定バサミ、斧などに使える便利な道具である。

飛行機で移動しました。また、ある学校は吊り橋の先にありました。

それぞれの学校で、圃場面積と栽培作物、飼育家畜の種類や頭数が異なり、また、使用する農具も良く管理されている学校がある一方、教師に任されているところもありました。学生が使う農具の種類は少なく、代表的なのが「マチェテ」（刃渡り60cmほどの山刀）で、街中でも木の剪定に使うなど重宝な道具です。

ほとんどの学校では、トラクターとプラウ、デスクハロー、防除機などの大型機械は導入されていましたが、モアーやハーベスタ等の収穫機械はほんの一部の学校だけでした。ニカラグアの小中農牧経営に対応する機械がほとんどないのが気になりました。

一方、倉庫で眠っている近代的な機械器具や装置も目撃しました。

5. 教 師

ニカラグアでは、女性の進出がめざましい。

ニカラグアの研修生が大分の教育現場を視察した時、教師も学生も全て男性だけだったことがあったのを見て、研修生から女性はなぜいないのか質問があり、回答に困ったことを思い出します。ニカラグアの政府機関では、規則として一定割合女性を登用する規則があるようで、女性の職員や管理職を驚くほど目にします。

農業の専門科目を教える教師は学校に5～8人程で、先に挙げた科目数と比較するとかなり小人数です。当然一人が複数科目を受け持つことになり、しかも、担当科目は毎年変化するので、本人の専門でない教科も勉強して教えるなければなりません。

公務員が本業以外に職を持つことは、日本では考えられませんが、ニカラグアではごく普通のことのようです。平日はINATECで働き、土曜日は大学で教えるという人が何人もいました。理由としては、優秀な人材が少ないためではないかと推察しています。大学の数が多いことも関係しているのでしょうか。

プロジェクトの取り組み

1. ニカラグアの職業訓練

ニカラグアの職業訓練は、国家技術庁（INATEC）が担っています。農業以外にもホテルサービス業、工業、電気、商業、コンピュータ操作、縫製などの学校が配下にあります。



INATEC庁舎の壁画。偉人や独立に寄与した軍人の絵が多い。

企業が支払う賃金の一部が税金としてINATECに入る仕組みになっているためか、職業訓練学校の卒業生を会社ですぐに使える技術レベルにしてほしいと、企業からの要望が強く課程の見直しとカリキュラムの改善に取り組んでいます。

この影響で、2013年のプロジェクト開始時の専門科目は20科目であったが、2015年2月に21科目に増加し、同じ年の12月には8科目と大きく減少しました。方針を決める時に、性急に結果を求めるため、民間の意見を取り入れるなど事前の十分な議論が不足しているのです。このような試行錯誤になるのでしょうか。カリキュラムや科目の変更は、必ず指導要領の変更を伴い、現場教師も振り回される結果になります。改訂作業にも大きな影響を及ぼします。

2. 任期中の具体的成果

プロジェクトの第1の目的はテキストの改定で、当初の科目数は20と多かったため、4グループに分けて取り組むことにしました。第1グループは6科目（農業関係3、畜産関係3）とし、ニカラグアでは初めての手法＝国の行政研究機関や大学教師を巻き込んで分担して執筆する＝で改定に取り組みました。提出された原稿は、大学のテキストに近いものや辞典のように解説が多かったり書きっぷりに大差があり、また、インターネットの写真を引用したりと、問題山積でした。こうした問題に対応して、日本人専門家は全体的な内容の見直しと学生にわかりやすく、教師も教えやすいテキストを目指して原稿の修正や図表などの検討をおこなった。テキストの本文中の絵は全て線画に置き換えるため、絵描きを雇いました。原稿の提出が遅れたり、校正に予想外に手間取るなど出来上がりまでにかかなりの時間を要したが、2015年8月に印刷されたテキストを見たINATEC関係者は満足したようでした。しかし、記載内容に間違いがあったり、国の方針と異なる記述があるなどとして、教師による見直し評価の後に大々的に



印刷されたテキスト。



市場の野菜と果物。計り売りか個数売り。

印刷公表することとなりました。畜産関係3冊の修正作業は、私の任期が終わる2015年12月までに済ませ、2016年2月の新学期に間に合わせる事ができました。

この修正作業と平行して、第2グループの改訂作業を進めてきました。こちらは、原稿の提出を待つ、図表やコラムの挿入、口絵写真の記載を進めながら、原稿内容の検討に取り組み、執筆者との検討をすませたところで、任期終了となり、最終的な校正は残ったスタッフや日本人専門家に委ねることになりました。

ニカラグアで驚いたこと

1. 食事と健康

ニカラグアの食事は、長粒種の米、フリフォーレス豆、トルティージャが主食です。これらに副食として、肉や野菜があります。料理には油と塩がよく使われます。砂糖は使わないようで、辛みはアクセントとして振りかける程度です。



一般的な昼食。ジュースは欠かせない。

街中の食堂では、ガラス越しにこれらの料理が器に並べられていて、好みに注文します。飲み物は、通常ジュースでこれが甘くてびっくりしました。

このような食事のためか、肥満度の高い人が多く、歩くのも辛そうな人さえ見かけます。そのため糖尿病や心臓病の人が多く、インシュリンを持っている人を良く見かけました。この国では、糖尿病に対する食習慣の改善が必要だと思いました。

2. 服 装

ニカラグアは、年間を通じて昼間は30℃を下回ることはありません。明け方の最低気温も室内で26℃程度でした。このためか女性の服装は大胆なデザインが多く、肩を出し、背中や腹の見える服装もよく見かけました。特に若い



チャリティーでの楽団とサンバの踊り子。

女性はより露出度が多く、ほとんどの人が体にフィットした服装を着ています。そして、大きな胸やお尻をアピールしているようです。このような女性のファッションを撮影するのは気が引けて、ここにご紹介できないのが残念です。

3. 全盲のシニアボランティア

私の住んでいる家はJICAボランティアの宿舎近くだったこともあり、協力隊員やシニアボランティアの人達との交流は、他の専門家に比較してとても多かったと思います。隊員の活動上の悩みや帰国後の事、あるいは人生の悩みなどのおしゃべりで楽しみました。

特にシニアの方々は、自分の特技を途上国の国作りのために支援したいとの考えをお持ちで、厳しい環境を承知で活動に従事していました。お付き合いさせて頂いた中に、目が不自由な鍼灸師がいました。彼は30歳の時に完全失明し、その後、鍼灸マッサージを勉強して教員の



ボランティアの人とギョウザ教室。



お世話になった方々を招待しての送別会。

免許も取得して盲学校の教師として勤めました。
退職後ボランティアに応募して、2度目のニカラグアでの活動でした。ニカラグアでは日本人が経営する医学学校で教師として活動し、障害者の自立を支援していました。考え方が前向きで、積極的。目が見えていた時よりも、今の方が人生楽しいと、とても明るくおっしゃります。当然、現地ニカラグア人からも高い評価を得ていました。語学も十分にできない私は、ただ恥じ入るばかりでした。

地方創生への貢献

井 崎 宏

JICA九州所長

大分県JICA派遣専門家連絡会の皆様、JICA九州の井崎 宏です。大分県には何度か訪問させていただいていますが、まだお会いできていない方々が多数おられますので、これを機にどうぞよろしくお願いいたします。

まずは、大分県JICA派遣専門家連絡会の森 宣会長がドミニカ共和国の最高国民栄誉賞である「ドゥアルテ・サンチェス・メジャ記念栄誉賞」を受賞されましたこと、心からお喜び申し上げます。同国での長きにわたる医療分野での協力・貢献が評価されたということで、我々にとっても大変名誉なことでもあります。

昨年は青年海外協力隊発足50周年、そして同事業は今年「共働によるアジア地域発展への大いなる貢献」を理由に、アジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を受賞しました。皆様と一緒に取り組んできた事業がこのように高い評価をいただいたということは、我々にとっても大きな励みとなると思いますので、引き続きしっかりとフォローしていきたいと思えます。

さて、2016年ももうすぐ終了という時期になりましたが、昨年、今年と国際協力の分野では「節目の年・時期」でありました。昨年は「ODA大綱」が「開発協力大綱」に変わりました。MDGsがSDGsとなりました。そしてアフリカ開発会議・TICAD VIの会合が今年初めて日本ではなくケニアのナイロビで開催

されました。そのような中、JICAはこのような国際協力の大きな流れに歩調を合わせながらも、国際協力を通じ、開発途上国の発展に貢献するだけでなく、日本国内の地方創生にも貢献していくことに取り組んでいます。そのために、JICA九州では、九州の大学、自治体、NGOそして民間企業との連携を積極的に進めているところです。

最近の大分県関連では、大分県の企業がJICAの中小企業海外展開スキームを活用し、カメルーンでバイオトイレの普及に取り組んでいます。また、草の根技術協力スキームを活用して大分市の病院がケニアで医療技術の向上に取り組んでいます。12月には大分県、大分大学の協力もいただきながら大分県の中小企業海外展開の支援を促進すべくセミナーを開催します。

JICAの事業では、途上国の現地への貢献に加え日本へ帰国した後の社会還元が期待されています。その点から、派遣専門家連絡会は、帰国後の社会還元の「場」として非常に良い機会であると思います。ご多忙な皆様が集まり、JICAの事業への参加を通じて得られた経験・知見について情報交換を行いながら常に視野を海外に向け続け、さらにはいろいろな機会を通じて地元へ情報共有されることは大変重要です。JICA事業に携われた専門家の皆様の「知」がここ大分で更に拡散して、大分の発展に貢献していくことが大変意味のあることだと

思います。その意味で、このような貴重な「場」を息の長いものにしていく必要があると思います。

節目の時期に、九州における国際協力、そして地方創生への貢献という大きなテーマに対し、皆様と連携し、コミュニケーションよく取り組んでいきたいと思います。

引き続きよろしく願いいたします。

以上

先日のビデオ撮影で、松元さんから約8千人との話がありましたが、これはKITA独自に受け入れた研修員を含む人数です。本年3月末までに受け入れていただいたJICA研修員は、6,237名でした。

大分市の国際化の取り組み

林 聡一郎

大分市企画部文化国際課
国際化推進室

はじめに

本市では、今年3月に、国際化の指針となる「第3次大分市国際化推進計画」を策定いたしました。この計画は有識者と公募した一般市民からなる策定委員会で検討されたもので、市政運営の指針であるとともに、市民共有の指針となります。

基本方針として「広く市民がグローバル化のメリットを享受できるよう、多様な文化とあらゆる国籍の人々との共生や国際交流、国際協力を通じて、国際化を担う人づくりに努めます。また、民間の活動を積極的に支援するなど、市民との連携により、本市の個性や魅力を生かした国際化を推進します」を定めています。簡単に言うと「多文化共生」「人づくり」「場づくり」を進めて行こうということです。

「多文化共生」

平成28年10月末現在で、大分市内には2,722人の外国籍を有する市民が生活しています。他都市と比べてもさほど割的に多いわけではありませんが、地域や学校などではさまざまな問題が起こっています。また、最近では、地震や台風などの災害が頻発し路頭に迷う外国人もクローズアップされました。

これからは、外国籍を有する市民の生活サポートを行うとともに、日本人も積極的に多文化を理解し共に暮らしていく「多文化共生」を進め



なければなりません。

大分市では、生活サポートである「留学生への生活オリエンテーション」や「外国人向けホームページの運営」など行うとともに、おおい国際協力啓発月間事業を開催し、多文化理解の促進に努めています。

おおい国際協力月間事業におきましては、毎年、JICA派遣専門家連絡会にもご参加いただき、今回は「南蛮の風紀行 ザビエル・アルメイダ・マンショそれぞれの選択」と題しご講演いただきました。満員御礼につき、ご成功お喜び申し上げますとともに、今年度もご参加いただき

ましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。

「人づくり」

コミュニケーション能力の向上や、チャレンジ精神、多様性を受け入れるチカラを身につけるため、留学生が幼稚園や保育園などに直接出向き、英語を使った交流を行う「おでかけENGLISH」や、英語による宿泊体験「リトルオースチン村」など、国際交流や疑似留学を誰でも気軽に参加できるよう実施しています。

子どもの頃から世界に触れ、視野を広げることで、将来の選択肢を増やし、グローバルに活躍できる人になっていただくことを目的としています。

「場づくり」

「場づくり」は言い方を変えると「活動支援」。姉妹・友好都市などを活用した海外ビジネスのサポートや、参加型イベント「おおいたワールドフェスタ」の開催、国際交流イベント開催補助制度などを実施しています。さまざまな団体の活動を支援することで、まちやひとが活性化し、新たなにぎわいや魅力が生まれると考えています。

大分市の国際化に向けて

このように、大分市では、時代や市民の声を反映し、計画的、戦略的に国際化を進めることとしていますが、日本全体におきましても、2016年の訪日客は初の2千万人を突破し、2020年には4千万人まで増やすことを目標としています。また、2019年にはラグビーワールドカップ大分開催や、2020年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会などの世界的イベントが行われ、海外から多くの観光客が日本へ、そして大分市へ訪れることが予想されます。

大分市におきましてもこれらの開催を絶好のチャンスと捉え、子ども達の世界への関心拡大や、看板や案内などの多言語化、伝統文化の

再評価、ボランティア活動への参加など、国際化社会への準備を行うとともに、国際化の裾野を広げ、大友宗麟の時代に日本を代表する国際色豊かな都市であったように、日本でも有数の国際都市となれるよう計画をすすめてまいります。

おわりに

今回、JICA派遣専門家連絡会よりこのような貴重な機会をいただきましたことから、大分市国際化推進室が進める「国際化の取り組み」についてのお話をさせていただきました。

大分で国際的な活動を行うさまざまな団体や人が、今後、活動をするうえでのヒントになれば幸いです。

とっておきの写真1枚

松 本 俊 郎

大分大学医学部放射線医学講座

【作成者からの一言】

平成28年10月8日に、インドネシアの首都ジャカルタのホテルで執り行われましたアジア腹部放射線学会（ASAR）とインドネシア腹部放射線学会（ISAR）との覚書調印式での光景です。当連絡会会長で、ASAR 理事長の森 宣先生が、ISAR 理事長の Yonathan 先生（インドネシア大学放射線科教授）と固い握手をされておられるのが、とても印象的でした。ASARは日本、韓国、中国、台湾の4ヶ国がコアメンバー

となっておりますが、一昨年のシンガポールに続き、インドネシアもアジア地域における腹部放射線学会の仲間に加わり、ASARがアジア地域でのグローバルな学会に成長している手ごたえを感じました。

この後、森先生は贈呈品として手渡されたインドネシアの正装バティックに着替えられ、奥様と共にこやかに参加者と写真を取られていました（写真がピンボケしており、ここでお見せできないのが残念です）。



大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成14年3月1日制定)

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び大分県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を集結して、前記の動向の有効な発展に質すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- (1) 政府開発援助(ODA)の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 大分県と海外諸国(特に発展途上国)との国際交流活動の促進、充実に質する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること。

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長を1名置く。また、世話役として2名、会計役として1名、計3名の幹事を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会は必要に応じ会計監査役2名を定めることとし、総会の議を経て会長が委嘱する。
- (6) 本会に事務局長及び編集責任者を定め、会長が委嘱する。

5. その他

この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、総会の議を経て施行する。

以上

付 則

この申し合わせ事項は、平成19年2月2日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成20年2月6日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成25年2月1日に一部改定し施行する。

編集後記

この度、会報18号、19号の編集を担当された大分大学医学部放射線医学講座の田上秀一先生より、編集責任者を引き継がせて頂きました、大分大学医学部放射線医学講座の高司 亮と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

本会報は、会員の専門家のみならず国際協力をご経験の方々に広くご寄稿頂き、任地での国際協力の現状を会員の皆様で共有するという趣旨のもと19年に渡り発刊が継続されており、本号は第20号となります。このような節目の年に、編集担当の任を現会長の森 宣教授より仰せつかり、身の引き締まる思いでございます。

今年の7月には森宣教授がドミニカ共和国よりドゥアルテ・サンチェス・メジャ賞コメンダドール位を受賞されるという大変大きなニュースがございました。本号においても、大分大学放射線部の中山晃一先生より森宣教授の受賞された賞の紹介と授賞式および祝賀会の様子についてのご紹介、寺尾英夫大分大学名誉教授よりドミニカ共和国におけるJICAプロジェクトを振り返っての総括を寄稿頂きました。また、中村 進先生よりニカラグアでの農業訓練に関する第二報を、JICA九州の井崎宏所長より地方創生への貢献について、大分市企画部文化国際課国際化推進室の林聡一郎様より大分市の国際化の取り組みについてご執筆頂き、大分大学放射線医学講座の松本俊郎先生からは今年の10月にインドネシアで執り行われたアジア腹部放射線学会とインドネシア腹部放射線学会との調印式について、とっておきの写真1枚という形でご紹介頂きました。御多忙中にも関わらずご寄稿頂きました皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。

本誌の最後には、専門家連絡会事務局よりの申し合わせ事項を掲載しておりますので、どうぞ御確認下さい。

本会報は皆様からの原稿により、冊子の体裁を維持し発刊されております。会員諸氏あるいは関係の皆様には今後も広く、随時原稿を募集致しますので、専門家の派遣情報やご体験、あるいは関連のご経験やご意見をお持ちの方々は下記までご連絡頂きますと幸いです。今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。

高司 亮

大分県JICA派遣専門家連絡会会報編集責任者

連絡先：〒879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘1-1

大分大学医学部臨床医学系放射線医学講座

Tel：097-586-5934, Fax：097-586-0025

E-mail：takajiry@oita-u.ac.jp